

「仕えるために来られた救い主」ーマタイによる福音書講解説教 82ー

エレミヤ書 第49章 12節  
マタイによる福音書 第20章 17節～28節

説教 岡村 恒 牧師

『私が来たのは、仕えられるためではなく、仕えるためである』。仕える・与えるという言葉で、主イエス・キリストは、ご自分が地上に来られた唯一の目的について、また、神の国についてお語りになりました。目に見える地上の世界と重ね合わせるように、神の国について想像してしまう私たちに、主イエスは、本当のことをお話になりました。

エルサレムに行く途上、主イエス・キリストは12弟子をひそかに呼び寄せて、これから起こることをあらかじめお話しになりました。「人の子は祭司長、律法学者たちの手に渡されるであろう。彼らは彼に死刑を宣告し、そして彼をあざけり、むち打ち、十字架につけさせるために、異邦人に引きわたすであろう。そして彼は三日目によみがえるであろう」(18節～19節)主イエスは、手から手へと渡され、死んで墓に葬られ、よみがえると言うのです。あのエルサレム入城の場面、人々は凱旋した将軍を迎えるように勝利の叫びをあげて、主イエスを大歓迎しました。弟子たちは、時の人、ナザレのイエスの弟子として入城します。しかし、弟子たちの思いと神の計画の間には大きな開きがありました。

ゼバダイの子、ヨハネとヤコブの母が主イエスのもとにひれ伏して願い事をします。二人の息子を、御国で一人は右、一人は左につけると、お言葉を下さいと。この抜け駆けを聞いて憤慨した10人も考えていたことは一緒です。同じことを願っていたから憤慨したのです。主イエスはこの願いを聞いて言われました。「あなたがたは、自分が何を求めているのか、わかっているか」(22節)これが私たち人間の実態です。十字架の上で、主イエスが祈られた執り成しの祈りを思い出します。ご自分を磔にして殺そうとしている者たちのために、また、主イエスを捨てて逃げ出した弟子たちのために、主イエスは神の赦しを祈り求めて下さいました。

神の国は、私たちの想像など遥かに超えた仕方であらざる、そのことを主イエス・キリストは語られました。キーワードは「仕える」、「与える」という言葉です。主イエス・キリストが地上に来られたのは、仕えきり、与えつくすためでした。この日、主イエス・キリストはそう言われたのです。

「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがな

いとして、自分の命を与えるためである」(28節)あがないという言葉は、戦争捕虜や奴隷になった人の自由を買い戻す《身代金》を意味します。命を買い戻す、それがあがないという言葉の意味です。主イエス・キリストはご自分の命をあがないとして与え尽くして下さいました。また、「僕とならねばならない」(27節)という時の「僕」とは奴隷のことです。命も時間も力も、全てを相手に与え尽くす姿を指しています。これが、主イエスご自身の姿を言い表しているのです。ですから聖書は言います。「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは、御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネによる福音書 3章16節)

聖書はしばしば、こうしてはならない、こうしなさいということをお私たちに語ります。その一番の土台は《十戒》でした。しかしこの十戒には、大切な前文があります。「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である」(出エジプト記 20章2節)だから私を神と呼び、私の前に祈りつつ歩んだらよい。神はそう言われたのです。守るべき命令をお与えになったのではなく、まず神がご自分の民を選び、滅びの地から救い出して下さいました。神によって救い出された者に向かって、深い信頼を寄せて、神を愛し、神に従って生きたら良いと語りかけ、約束し、必要な助けをお与え下さったのが神です。

イエス・キリストを救い主と信じるキリスト者は、キリストのもの、魂にキリストの十字架の刻印を帯びて、キリスト以外の者は誰も私たちを支配することはできなくなった存在です。まず神によって、主イエスのあがないによって死と滅びから救い出されたのです。そしてあたらしい命を生きるように招き出されたのです。そうであれば、キリスト者は互いに愛し合い仕え合うことができます。そのために必要な力も、愛も、忍耐も、必ず神が与えて下さるからです。

これから主の食卓を囲みます。パンと杯を受けるとき、洗礼を受けた者は自分が何者かを思い知ります。他の誰のものでもない、主イエスの祈りを持つ者です。主イエスが神を信じて生きる道を用意して下さいました。感謝して主の食卓を囲みましょう。

(記 説教要約奉仕者)